

「落語と私」 その拾

三代目 橘ノ百圓

十一. 強情灸

次に出てくる「南瓜屋」と、この「強情灸」は共に、五代目小さん師の得意根多の内の二ツです。圓師匠は、小金治さんに教わったと話してました。これも良く寄席で懸る噺ですが、今は柳家の流れより、古今亭の形の「峯の灸」から入る演り方が多い様に思われます。又、志ん朝師が、明るく楽しく演じていたので、その印象が強く残っています。柳家の運びは、どうしても前半が地味ですからネ。

「あらずじ」

しばらく顔を見せない友達を気遣って、兄貴分がその家に様子を見に行くと、先日の大雨の時に、外で仕事をしていてズブ濡、体の芯まで冷えて腰が痛くてしょうが無いので、翌日、芯から温めようと銭湯に昼から夜まで入っていた為に、逆に湯当りをして洗い場に倒れてしまう始末、これを見た銭湯の客が「大変だ!」と冷たい水を掛けた為に、また芯まで冷え時に、客の一人に床屋の親方が居て、「腰の痛みには灸が効きますヨ」とわざわざ灸を据えに来てくれて「灸は、毎日据えなきア効かないが、私は仕事の都合で来られない日が在る、艾を置いて行くから、今据えた上へ上へと誰かに据えて貰うんですヨ」と言って帰ったので隣の婆さんに頼んで据えて貰っているのだが「俺ア考えちゃった」「どうしたんだ!？」と訊くと「上へ上へと親方が言うので、背筋、伝って上へ上へと据えて、昨日が頭の天辺、これ以上昇り様がないので今日から下がる事になる」と見ると、おでこに黒いのが二ツ、これが灸の跡だと言う「明日は臉、皮が薄いから熱いだろうネ、明後日は目の玉、皮無し、それも良いけどズーと下りて・・・。」兄貴分が呆れて「バカだネお前は、上へ上へテエのは床屋の親方が据えてくれたその上に、重ねて据えるのを上へ上へテエんだよ、俺が効かしてやるから艾かきなヨ」「熱いから止めた」「熱かアないヨ」「そりアお前は据えてる方だから熱くないヨ、自分で据えてごらんヨ、火を点けたとたん、熱イって飛び上って天井蹴破って逃げちゃうから」これを聞いた兄貴分がムツとして「テヤんでエ、その艾アこっちへ貸してごらんヨ」と、残っていた艾を全部解すと、お握り大の塊を作り、それを腕に乗せて「どうでエ凄エだろ、これに火を点けるンデエ」と火鉢に熾きている炭でこの艾に火を、「熱くも何ンとも無エヤ」「そりアまだ火が回らないからだヨ、それが真赤になってごらんヨ」(中略)兄貴分が「お前エ石川五右衛



「大江戸万華鏡」 農山漁村文化協会刊 中表紙挿絵から
出典：<http://ginjo.fc2web.com/157goujoukyu/goujoukyu.htm>

門を知ってるか!？京都は四条河原で釜茹の刑だ、釜茹ったって、グラグラ煮えてる油ン中へホツポリ

込まれたんでエ、それでも、ニッコリ笑って辞世を残してるンデエ、石川や浜の真砂は尽きるとも・・・

我れ泣きぬれて蟹と戯る」これから、八百屋お七の話を出したりで痩せ我慢をしていたが、我慢しきれなくなって、腕の艾を払い落とすと「アア冷めテエ」「冷めテエだってやら、どうでエ熱かったろ!？」「イヤ、俺は熱くねエが五右衛門は、さぞ熱かったろう」いかにも落語らしい、とたん落ちですネ。

「圓師匠の説明」

これは先ず、仕草で語る噺で、クドクドとした説明はなかったですが、この頃は、テープに録音しての稽古で、一遍のだけの稽古を音に録り、それを聞き、数ヶ月してから便箋に書き起して覚える作業で、便箋の数も極めて少なかったです。噺を覚える内に仕草も自然に身に着くもので、仕上げの時も数ヶ月直された程度でした。先ず、前半は地味な会話だから、弟分は患っているので少々気弱に、その対称として兄貴分は元気に噺を盛り上げて行き、艾を取り上げてから自分の世界に入って行く演出を教わりました。多くの噺家さんは、手の甲側に艾を乗せますが、圓師匠の形は手の平側に乗せて「こっちの方が幾らか広いから乗せ易い」と断って乗せ直します。手の平側の方が皮も薄くて熱そうですよネ。艾に火を点けたら腕は動かさない様に、只ただ我慢。時間経過は各派によって違いますが、長い時間は無要です。皮膚に熱を感じた時から、徐々に熱くなる訳で、股を抓ったり、片方の腕で頭を抱えたり、ひたすら我慢をした結果！堪らず艾を払い落して、自分に言い聞かせるように「五右衛門はさぞ熱ったろう」この台詞は、声を張らないようにと言われました。又、他人の噺を良く聴き、仕草も良く観るようにとも教わりました。稽古は大事ですが、稽古だけでは解決しない噺ですネ。

十二、^{かぼちゃ}南瓜屋

「※落語の登場人物はと言いますと、熊さんに八っつあん、横町のご隠居さん人の好いのが甚兵衛さん、バカで与太郎」で始まります。この与太郎が主人公です。これは、大阪噺の「みかん屋」を四代目小さん師が改作したもので、柳家直系の噺です。小金治さんは当然、五代目小さん師からで、それを圓師匠から私へと繋いだ訳で、身が引き締まります。

「あらすじ」

与太郎の母親から「何か仕事をさせてくれ」と頼まれた伯父さんが、与太郎を呼び出し「今年は、南瓜の当り年だ、南瓜ア売って来い」と言われ、嫌や嫌や荷を担いで表へ出た与太郎が「暑いナァ、日本の国は良くなった良く成ったテエけど、まだ南瓜ア食う奴がいるんだネ、作る奴がいるから食う奴がいるのか？食う奴がいるから作る奴がいるのか？どっちにしたって、間の悪い奴は間に入って売る羽目にならァ」とブツブツ言いながら伯父さんに言われた通り狭い路地に入ったが、前に蔵が有って行き止り、諦めて帰ろうとするが、六尺の天秤棒が長屋の壁にブツカッて廻らない、そこで与太郎さん「前の蔵アどける、路地イ掘げろ」と大きな声を出すと、壁をブツケられた家の男が顔を出して「馬鹿野郎、三尺の路地イもって来て六尺の天秤が廻るかヨ、天秤下ろして体だけ廻ってみろ」「アッ廻れた」「当り前エじゃねえか、この野郎人の家の壁エこんなに傷付けやがって、張り倒すぞ!」「針なんか倒したって怖かねエヤ」「殴るテエんだヨ」「幾つ?」(中略) こんな遣り取りが在ってスツカリ与太郎を気に入ったこの男が、親切に荷の南瓜を全部近所の人に売ってくれるのだが、その間、与太郎は、伯父さんに言われた通り、上を見る為表に出ている有様、戻って来た与太郎が、南瓜が全て売れたのを見て「何ンでエ商なんて訳ねエヤ、サァ帰ろう」「オイオイ俺が苦勞して売って遣ったんじゃねエか、有難うございますぐらい言ったらどうデエ」「どう致しまして」荷を空にして帰って来た与太郎は、伯父さんに誉められ「売上げを出してご

らん」「ハイこれ」「この野郎あきないな商馴れてやんナ、元を別にして来やがり、儲けを出してごらん」「儲けはそれ」「こんなに儲かる訳ねエや、上を見たのが有るだろ」「ウン、見たもんは出せないヨ」「お前めエ幾らで売ったんだ」「大きい方が十三銭、小せえのが十二銭」「そりゃ元じゃねエか！伯父さんが上を見ろと言ったのは、十三銭の物を十五銭、十二銭の物を十四銭で売るから、そこに二銭ッの儲けが出る、上を見ろと言ったのは掛け値をしると言う事だ、掛け値しねエで女房子が養えるか！もう一度行って来い」と再度ふたたび表へ出された与太郎は先程の長屋へ「オジさん南瓜買っとくれヨ」「どうしたんでエ・・・アアありゃお前めエの地じか、俺ひょうきんア剽軽で遣ってると思ったんだが、歳は幾つでエ」「歳は・・・六十」「六十！どう見ても二十歳はたちぐれエにしか見エねエがナ」「ウン本当は二十歳、四十は掛け値」「オイ歳に掛け値してどうするんだヨ」「掛け値しないと女房子が養えない」



「圓師匠の説明」

与太郎は無理に造るナ、自然に遣るのが一番だが、そこは伯父さん、長屋の男とハッキリと区別する様にと言われ、荷を担ぐ時は、重そうに、伯父さんは甥の与太郎が可愛いのだから本気で怒っちゃいけない、長屋の男も重要な人だから、勢い良く台詞を言う様にと言ってくれました。

「落語豆知識」

※「落語の登場人物」

古典落語の面白さは、登場人物が固定化していて、名前を聴いただけで、その人の性格が判ると言う処に在ると思います。熊さん八つつあんは長屋住いで、チョイとガサツで人が良く、ご隠居は必ず横町に住み、もの識りとして皆んなから重宝がられる存在、甚兵衛さんはお人好しで嬢もんな天下、デツ馬鹿で与太郎、この与太郎さんも色々で「ろくろっ首」の様に色気付いたのもおります。他には、道楽者もんの若旦那、花魁おいらんの名前は黄瀬川、お殿様は赤井御門守あかいごもんのかみ、石高は拾貳萬參阡四百伍拾六石七斗八升九合と一摘ひとつまみ、家老は田中三太夫さん、まだまだ沢山いますので「落語紳士録」でも作りますか！？

～お知らせ～

三代目 橘ノ百圓さんがライフワークにされている「第28回 小天狗よったり会」が平成30年10月28日(日)午後2時から、神楽坂・善国寺 毘沙門天ホールに於いて開催されます。木戸銭は500円。皆さまお見逃しなさいませんように。

